んだことは、その直後に『古史通』を幕府に提出していたことから明らかである(二一八頁)と断ぜられ、さらに加えて、「天統の国」統への權威の移譲は、当代における「天皇から国」王への来るべき權威の移譲を予示するものであったのである(二一八頁)と説かれるとき、眼から鱗が落ちる思いをすると同時に、たんなる語呂合わせ以上の意味をもっているのかという思いもまた、禁じえない。たんに天統の始祖「天御中主神」と国統の二祖「国常立尊」の頭文字をとつたまでで、これを「天皇」から「国王」への予示といえるのか、そのような思いにとらわれる。

先にあげた『読史余論』にせよ、この八十の宮降嫁問題にせよ、「木を見て森を見ず」式の末梢的な解釈であるかもしれない。しかし、それが本書の全体構想と方法にかかわるものであると、評者には思えたので、あえて林信篤的な反対論を提出したが、すべて評者自身の問題関心に強引に引きつけた一面的なものである。本書が後学に与えた強いインパクトの拙い一例として、ナカイ氏の寛恕を請う。

(愛知教育大学助教授)

前田勉著

『近世神道と国学』

(ベリかん社・二〇〇二年)

高橋 美由紀

本書は、一九九六年に『近世日本の儒学と兵学』によって儒学と兵学の対向という独自の視点から近世思想史を分析することで、その全体像の再構築を目指すという意欲的な研究で思想史研究に重要な一石を投じた前田勉氏の二番目の論文集である。前著同様、その雄大な構想とそれを裏付けるきめ細かな分析によって重厚な書物となっている。しかし、本書の持つ意義は何と言っても神道と国学における「現人神天皇」や「日本」そして「神」をめぐる言説、戦後の思想史研究において、意識的にせよ無意識的にせよ、それを真正面から論ずることが忌避されてきた問題に果敢に立ち向かい、それが近世思想史研究のみならず、現代の我々の問題としても極めて重要な問題であること、読者の前に明瞭に示したことにある。

戦後の日本思想史研究のなかで、「現人神天皇」や「日本」そして「神」の存在を価値の中核に据える神道と国学は、その

教説の持つ強烈なイデオロギー性の故に、思想史研究にとつてきわめて重要なテーマであるとの認識はあつても本格的な研究の俎上に載せられることがないという異常な状況が続いてきた。いうまでもなく、その背景には敗戦にともなう伝統的価値観への拒絶や、戦後の学界を支配してきたマルキシズムの問題等がある。「現人神天皇」の觀念や「神」そして「神国日本」の存在はもはや過去の遺物であり、できれば歴史の闇のなかに封印してしまおうとしていたといえようか。しかるに、冷戦構造の崩壊と世界の政治的・経済的構造の激変は、思想史研究の分野にも新たな潮流を生み出し、近年、神道や国学に関する研究が活発化しつつある。このことは、単に思想史研究に携わる世代が新しくなったということだけでなく、自らの足元の現実を見据えることなしには、もはや前に進むことはできないというこの国が置かれている時代状況が底流にあるものと思われる。

とはいえ、この封印された思想の箱の蓋を開け、それを眼前にさらして、その歴史的意義を明解に論じることがそうたやすいことではない。一つには、それを対象化し得る視点が確保されていなければならないし、もう一つには、儒教や仏教、神道についての深い素養が必要だからである。本書において、前田氏は、ナショナル・アイデンティティという視点に立つて近世の神道と国学の流れを捉えようとした。この視点は、おそらく近世の神道と国学を捉えるための最も重要なポイントであろう。そして何よりも、前田氏は、前著『近世日本の儒学と兵学』で

示されたように近世儒学への深い造詣の持ち主である。近世の学問や思想の柱をなすものは、いうまでもなく儒学であった。さまざまな教説は、儒教思想の受容と変容、あるいはそれへの対向という形で展開している。したがって、近世思想史研究には儒教についての深い理解が不可欠である。神道や国学の研究においても例外ではない。逆に言えば、それなしには神道や国学の思想を学問的に対象化することは不可能であるということでもある。このように考えるならば、近世の神道と国学は、前田氏という最適の研究者と邂逅することができたのであり、その手によつてはじめてその顕わな姿を箱のなかから現すことができたといえよう。

二

本書の構成は次の通りである。

- 序章 近世日本における天皇權威の浮上の理由
- 第一章 林羅山の『本朝神社考』とその批判
- 第二章 仮名草子における儒仏論争
- 第三章 増穂残口の神道説と「日本人」觀念
- 第四章 呪術師玉木正英と現人神
- 第五章 吉見幸和の「神代」解釈
- 第六章 『書紀集解』と本居宣長の日本紀研究
- 第七章 三輪執斎の神道説——『神道憶説』をめぐる
- 第八章 慈雲の雲伝神道の思想

第九章 宣長における「心だに」の論理の否定——垂加神道と宣長との関係

第十章 本居宣長の天皇観——「天壤無窮の神勅」と梶津日神との関連

第十一章 平田篤胤における日本人「神胤」観念

第十二章 生田萬の思想形成

第十三章 鈴木重胤の鎮魂論

第十四章 大國隆正の「やまごころ」論

前著『近世日本の儒学と兵学』の場合と同様に、まず序章において本書全体の問題意識と視点を提示するとともに全体の内容を概観し、各論に入っていくという形をとっている。以下、各章の内容を要約しつつコメントを付していく。

序章で筆者は、何故に近世日本において権力とは直接にかかわることのなかった神道家や国学者から天皇への崇拜心が生まれるのかを説明するのが本書の意図するところであるとして、アントニー・スミスのナシヨナリズム論における、「ナシヨナリズムは知識人の『アイデンティティの危機』にたいする解決策」であるとの命題に着目し、この命題を手がかりに近世日本の思想を説明しようとしたと述べる。その上で、近世初頭における儒者による仏教批判は、その論争の帰趨があいまいであったために「宙ぶらりん」の者達を生み出し、その間隙をぬって垂加神道が登場し、天皇への崇拜と独自の靈魂観による安心論によって、「仏教と儒教のふたつの普遍宗教の間でふらふらし

ていた知識人」に「日本魂」というナシヨナル・アイデンティティを提供」したとする。垂加神道は、秘伝という装置によって現人神たる天皇への崇拜という「突飛な観念」「不可思議な信仰」を保証することができた。すなわち限られた者のみに許された道への参入の喜び、それが垂加神道を支えていたと見られる。このことは逆に天皇崇拜を「凡人」としての万民に拡大していくことを困難にした。国学登場の意義は、この秘伝を否定し、公開された「神典」によって「現人神」としての天皇の存在を万民ひとりひとりに直接むすびつけた」ところにあるとし、かかる思想を支えたものは、「凡人」としての庶民のこの世への不条理感、不条理の世に生きざるを得ない悲しさであり、そのなかにおいて「凡人」の希望の光として天皇は浮上したのだという。とりわけ幕末の内憂外患の危機的状況下、知識人のみならず誰もが不条理を感じざるを得ない中で国学の天皇崇拜思想は大きな力を発揮していったと見ている。

本書で説明しようとした近世思想の流れの全体像が本章に明確に示されている。ただ、近世前期の思想状況を儒教と仏教という二大普遍思想の綱引きという局面でとらえ、どちらにも全面的にコミットしえない知識人の宙ぶらりんな精神状況の中から「鬼子」的に神道が登場するという図式には再検討の余地があるのではないか。この時代の神道の実態が明らかにされていないからである。戦国時代に吉田兼俱により体系化された吉田神道は、三教一致の立場に立ちつつ神道の優位性を説くもの

であったが、安土桃山時代から江戸初期にかけて儒教思想との融合に努めるとともに、『日本書紀』神代卷の伝授を通して単に公家や神職層のみならず武士階層にも浸透していた。そこでは当然のことながら神孫たる天皇像が明確に語られているのであり、それは江戸前期の世界のなかで、武士も含めて一定の共通理解として存在していたのではないか。江戸前期の儒者達が多くが何故に神道に言及する必要があるのか、何故に羅山があえて理当心地神道を唱える必要があったのかは、この時期の神道のありようを見据えながら検討されねばなるまい。そのことと関連するが、「現人神天皇」観は、垂加神道により突然変異の如く登場したというよりは長く深い伏流水が存在していたと見るべきであろうし、かかる思想的な背景なしに「突飛な観念」「不可思議な信仰」たる天皇崇拜が受容されることはあるまい。とすれば、垂加神道における秘伝の意義についても、もう少し検討の必要がでてくるということになる。まさに、単に秘伝という装置のみで、「突飛な観念」「不可思議な信仰」たる現人神天皇像が受容されるのかという問題とも関わるからである。

第一章の「林羅山の『本朝神社考』とその批判」は『本朝神社考』の仏教批判とそれに対する仏教側からの反論を検討することにより、近世前期の儒家神道がはらんでいる問題点を考察したものの、神観念をめぐる羅山が考えるほど神道と儒教との結びつけが簡単ではなかったことを指摘するとともに、仏教側

の「異域の教」としての儒教観のなかに宣長による儒教批判の先駆があったとする。『本朝神社考』に対する仏教側の批判を検討することで、儒家神道登場の思想的意義を抽出しようとする方法は極めて有効な視点だが、何故に羅山が神道説を唱道する必要があったのかという点への言及がほしい。

第二章の「仮名草子における儒仏論争」は儒仏をめぐるの教義問答体仮名草子を検討することで、両者の対向関係を民衆意識とからめながら考察したものである。儒教側が来世や靈魂をきっぱりと否定できなかったこと、儒教的な「中華」理念と近世日本の国家社会がほど遠いものであったことが、神道や神国という言葉説、儒教や仏教と異なる教説たる神道が浮上する契機をもたらしたと指摘する。近世神道が生起する秘密の一端に迫る興味ある指摘である。ただし、前にも述べたように綱引きの対象となった第三の道としての神道の実態を明確にすることが必要であろう。

第三章「増穂残口の神道説と『日本人』観念」は、江戸中期の神道講釈家として知られる増穂残口の思想の分析を通して、人々の間に神道説が受容される時代状況と心のありようを考察したものの、太平の世にデラシネ化した江戸の人々の喪失感に込める形で神道が受容されていく様子を描き上げたこの論考は、日本におけるナシヨナリズムのありようの一つの形を歴史的に検証したものとして評価できる。

第四章「呪術師玉木正英と現人神」は、垂加神道を大成する

とともに、その最盛期の中心人物でもあった玉木正英の思想を分析することで垂加神道の秘密に迫ろうとしたもの。正英を闇齋の思想の祖述者とする従来の研究を思いこみに過ぎないとして、橋家神道の呪法を取り込んで垂加神道の呪術性を強化するとともに、「現人神」たる天皇への絶対的随順により人は死後「神」となることができるという救済論をうち立て、秘伝という装置で人々のエリート意識に訴えた彼の教説の独自性にこそ垂加神道隆盛の秘密があるとす。その一方で秘伝を重視するエリート主義は、神道の庶民への拡大という時代の趨勢と矛盾を来すことになり、その隘路を突破すべく出現したのが国学であると論じている。垂加神道研究に対する新しい方向性を開いた力編。

第五章「吉見幸和の『神代』解釈」は、垂加神道の伝授を受けながら独自の神道観を樹立した吉見幸和の思想について、彼の神代紀の解釈を材料に、「神代」観とりわけ神観念の特質を論じたもの。幸和の思想を「儒教的合理主義」と断ずる従来の見方を否定し、玉木正英から伝授された靈魂の不滅性と「人が神になる」思想を忠実に継承し、神霊の实在を確信していた点を強調して、彼の思想の持つ非合理性を指摘する。彼の思想の核心に垂加神道、とりわけ正英によって確立された秘伝が存在することを指摘している点は、幸和研究に重要な視点を提供するものと言えよう。

第六章「『書紀集解』と本居宣長の日本紀研究」は、『書紀集

解』と宣長はともに垂加神道の付会を批判する立場から古典研究を学問化したのが、前者が普遍主義の立場から神代の物語を単なる古伝、古俗とみたのに対して、宣長は古事記の古伝にこそ事実があるとして普遍主義を批判し、結果的に垂加神道の唱道した太陽と天照大神と天皇の三位一体思想を継承することになったと説く小論。神観念の問題や古伝と天皇の問題等、十分な議論が展開されておらず、筆者のいわんとする所が十分論証されていないというらみがある。

第七章「三輪執斎の神道説——『神道憶説』をめぐる」は、これまでの近世神道思想の研究で看過されてきた三輪執斎の神道思想を紹介した論考。彼にとって神道とは何だったのかという核心は十分に明らかになったとは言いが、近世儒教と神道をめぐる思想交渉の多様性を改めて認識させられる論考である。

第八章「慈雲の雲伝神道の思想」は、江戸中期の雲伝神道を唱道した慈雲の思想形成についての論考。「神書」に基づき日本こそは「神祇」の守護する「赤心」の国として万国に優越すると説く慈雲の思想は、同時代の宣長の思想に通じるものであり、その背景には蘭学の興隆などで中国や日本が相対化されるなか「自国の優越性を弁証する必要を迫られていた」時代状況があったと指摘している。しかし、世界観の拡大が自国の優越性の弁証を生み出す理由や、慈雲の天皇観・朝廷観が論じられていない点は残念である。

第九章「宣長における『心だに』の論理の否定——垂加神道と宣長との関係」は、神と人との関係の徹底的な隔絶という宣長の人間観の特質を浮彫にした好論。ただ、このように神との関係において徹底的に人間を受動的な存在と理解した場合、それでは人間の主体性は全く存在しないのかという疑問が生じる。すでに歌に「神をもあはれと思はせ」る功用を認めた時点で能動的なベクトルは前提されているのではなからうか。後論を期待したい。

第十章「本居宣長の天皇観」は、宣長思想の歴史的意義が天皇を「万民ひとりひとりの生に関わる存在」として意義づけたことにあるとし、その秘密を宣長独特の禍津日神解釈を通して説明しようとした論考。被治者としての宣長の生への眼差しの中に、彼の天皇観と禍津日神観の秘密があるとすることの論考は、宣長の思想理解に新しい面を開くものであり、「認識されたこととの認識」という氏の方法の優れた達成といえよう。

第十一章「平田篤胤における日本人『神胤』観念」は、篤胤の「神胤」観の分析を通して、その幕末思想上の意義を考察した論考。篤胤の思想は、独自の神話解釈をてこに貴種のみならず天下万民が天皇の系譜に連なるという新たな神話を創出し、身分や階級を超えた「日本人」という観念を創出することによって、幕末の人々、とりわけ「草莽」の志士達の政治参加を促すイデオロギーとして大きな役割を果たすことになったと説く。

第十二章「生田萬の思想形成」は、篤胤思想の展開の形を、

生田萬という武士出身の国学者を通して検討し、心情的ラディカリズムを特徴とする武士的国学が生み出される様相をくつきりと浮かび上がらせた好論。

第十三章「鈴木重胤の鎮魂論」は、幕末の国学者鈴木重胤の思想を、独自の鎮魂論を中心に論じたもの。彼の思想の特徴を現世の人々の生活を聖化する「徹底した現世主義」に求め、平田国学の流れのなかの「農民生産者型コース」の思想家と位置づけている。鎮魂論を核に据えたこの重胤論は、思想の全体像の説明がまだ不十分な鈴木重胤の思想理解を大きく進めるものと評価できよう。

第十四章「大國隆正の『やまとごころ』論」では、隆正の思想が天皇個人への忠誠から「国」への忠誠へと重心が移動しているだけでなく、平常の人々の「あひたすけ・あひすくふわざ」たる生業は「神の妙智」によるものと説いた点は「天皇への忠誠に一元化されないような、ネイションの可能性」を含むとする。幕末維新期において、国学思想の流れの中に天皇の存在が希薄化されるような言説が登場してくることをどのように理解すべきなのか。隆正の「天皇万国総帝説」という独善的な国際秩序観」の存在と、筆者の説くような現人神天皇観の後退とはどのように結びつくのか。今後の研究の進展が待たれる。

三

以上、本書収載の論考の内容を紹介しながら、それぞれにつ

いて気付いた点をコメントした。先にも述べたように、明解な問題意識と「認識されたものの認識」という思想史研究の方法論に立った本書は、近世の神道・国学研究に新生面を開いた研究として高く評価されるべきものである。個々の思想をその思想が置かれていた歴史的社会的状況のなかで捉え直すこと、思想をその担い手の生の現実との対向関係のなかで「思想内在的な理解」をしようとする氏の方法论は、近世思想をきわめて生き生きとした形で我々の前に提示することに成功している。とりわけ、後半の国学思想研究においてそのことを強く感じさせられた。

同時に、この氏の研究によって、逆に解明されなければならない問題が露わになったことも事実である。個別的な点は既に指摘したので繰り返さないが、近世前期の儒者の多くが何故「神」の存在に執着する必要があるのか、近世という時代状況の中で「現人神」天皇の存在が浮上するのは何故か、というような大きな問題は、本書によっても課題として残されているように思われる。

それにしても、羅山から大国隆正にいたる神道・国学の潮流の全体像にしっかりと目を据えながら、そのポイントとなる思想家を的確に押さえつつ新たな角度から神道と国学の歴史的展開を再構築した研究は、戦後思想史研究のなかでも本書をもつて嚆矢とする。その意味で、本書は、戦後はじめて神道と国学のイデオロギー的言説を真正面から思想史研究の対象とした記

念碑的書物である。日本における近世思想史研究は、ここに始めて近世思想の全体像を描写するための基礎を築くことができたと見えよう。戦後、半世紀を経て、ようやく日本思想史学が一人前の学として成熟したことを示した書と云って過言ではない。

(東北福祉大学教授)